



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Well-being and Religion in Hong Kong : From the Perspectives of Welfare, Social Capital, and Subjective Well-being [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	NG, KA SHING
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12383号
Issue Date	2016-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63445
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Ng_Ka_Shing_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： NG KA SHING （伍嘉誠）

主査 教授 櫻井 義秀

審査委員 副査 准教授 カローラ・ホメリヒ

副査 教授 佐々木 啓

学位論文題名

Well-being and Religion in Hong Kong: From the Perspectives of Welfare, Social Capital, and Subjective Well-being

（香港におけるウェルビーイングと宗教—福祉、ソーシャル・キャピタル、主観的幸福感の視点から）

本論文は、少子高齢化が深刻化している香港を対象に人々のウェルビーイングと宗教との関係を論じるものである。伍嘉誠氏は、ウェルビーイングの理論と調査方法論に基づいて、ウェルビーイングと宗教との関係を宗教団体によるソーシャル・サポート、ソーシャル・キャピタルの形成、主観的幸福感の増進という三つの機能に着目し、宗教団体やコミュニティの事例研究、世界価値観調査データを用いた計量分析を行い、香港社会において宗教が人々のウェルビーイングに対してどのような働きをなしているのかを考察した。

近年、ウェルビーイングの研究として、OECD Better Life Index や Gallup Well being Index, Human Development Index などの国際比較調査をはじめ、経済学、心理学、そして社会学の各領域において、主観的幸福感を促進する社会的条件や心理的態度、社会関係の検討がなされている。宗教社会学においても、主観的幸福感や健康、メンタルヘルスと個人の宗教性やスピリチュアリティ、教団活動への参加などの関連を見る研究が世界的に進んでおり、理論や視座の共有が可能である。また、英国領植民地として特異な都市国家的経済発展を通して東アジアにおける「圧縮された近代化」を成し遂げ、中国返還後には特別行政区として政治・経済的に中国の影響力下にありながら自治を希求する香港社会の分析は、東アジア、現代中国社会の研究としても注目される。

本論文が達成した研究成果として、第一に、香港における社会福祉の制度的未発達と、それゆえの少子高齢化への備えの不十分さと、香港人の総体的に低い主観的幸福感への改善という現代的課題を、歴史的分析和現代の各種社会調査資料の分析から明確に提示したことである。第二に、香港のソーシャル・サポートの代替的制度として発展してきたキリスト教会および関連団体による社会支援の実態を複数の事例調査から示し、宗教系 NPO は今なお施設の設置やボランティアの派遣において香港行政府の福祉政策を補完している実

態を示したことである。第三に、従来ほとんど調査されていなかった一貫道という儒仏道の習合的新宗教による高齢信者への精神的サポートを、集会への参与観察や面接調査資料から明らかにしたことがあげられる。第四に、世界価値観調査データを用いて、香港のデータでは西欧社会におけるキリスト教会が果たすウェルビーイング促進の効果とは異なる宗教意識や宗教参加の効果の存在を示すことによって、国際比較調査へ問題提示ができたことである。

しかしながら、本論文で示された各章ごとの調査上の知見は有益であるものの、①本論文が扱う宗教の中身は大半がキリスト教的チャリティと教会コミュニティの機能に関するものであり、広義の宗教とウェルビーイングの関連を問うという大きな問題には迫りきれていないのではないか、②主観的幸福感の概念と測定の方法論が西欧の個人主義的人間理解に立脚しすぎており、香港を含めアジア的な共同的・社会関係論的幸福感を質問紙調査では把握できていないのではないか、という意見が委員から出された。もっとも、これらの質問は宗教意識やウェルビーイングの国際比較調査において西欧以外の研究者から現在提示されている本質的な問いであり、申請者含めて長期にわたって国際的な共同研究において取り組まれるべき課題であろう。

これらの諸点を口述試験で確認し、申請者が今後の研究課題については十分認識していると了解できたことと、申請者が学位申請論文の中核をなす各章を 5 本の査読誌を含む 8 本の雑誌・紀要・書籍分担執筆論文（英文 6 本、邦文 2 本）で公表していることから学術的水準を確認できるという点において、本審査委員会は、本申請論文が博士(文学)の学位を授与するのにふさわしいという結論に達した。